

ゼミナールの臨床教育学のために

毛利 猛

(香川大学 教育学部)

多くの（文科系の）大学教員にとって、講義、ゼミナール、そして卒論指導の三つが、大学における主だった教育の仕事になるであろう。

近年、大学における教育活動を見直そうという動きが強まり、高等教育研究もかなりの活況を呈しているが、しかし、上の三つの教育活動のうち、ゼミナールと卒論指導のあり方に関する研究はあまりなされていない。

今回は、教員養成学部で教えている私自身の経験の反省に基づいて、ゼミナールにおける教育活動について考察する。言うまでもなく、無条件に正しいやり方などというものはない。それぞれの大学教員の「教育する場」の条件によって、やり方は違って当然である。しかし、だからといって、ゼミナールにおける教育活動について議論することに意味がないわけではない。むしろ、そうした具体的な「教育する場」の条件をふまえた「臨床的」な研究が、もっと多くなされてよいと考える。

1. 教育活動の評価

大学教員の教育活動を評価することは大変難しい。上の三つの教育活動のうち、講義については、最近、多くの大学・学部で「学生による授業評価」が実施されるようになったが、それはあくまでも、多様な「教育活動の評価」の一項目にすぎない。その他の項目として、ある学科やコースのなかで、それぞれの教員がどれぐらいのゼミ生や卒論生を抱えているかは、彼らの学識と教育者としての魅力を測るために、かなり正確なものさしになると思う。

では、どういう教員のもとに学生は集まるのか。まず、多くのゼミ生を抱えている教員には学識がある。学識のある教員は、彼自身がモデルとなって、学問がどのように現実と切り結ぶのかを、生き生きと学生に示すことができる。だから、彼のもとで学ぶ学生は、学んだことを自分の生き方に関連づけることができるのである。

さらに、人気ゼミを主宰している教員は、「学問」の魅力とともに「人間」の魅力によって多くの学生をひきつけている。そういう教員は、ゼミの雰囲気は暖かいものになると同時に、ゼミ生のやる気を高めることに成功している。

2. 方法としてのゼミ、場所としてのゼミ

ところで、ゼミナールには、二通りの意味がある。一つは、大学における講義とならぶ授業の一形態としてのゼミナール、比較的少人数の学生による発表と討議を中心とする教育方法としてのゼミナールである。もう一つは、そのような発表と討議が行われる場所としてのゼミナール、教師と学生の共同体としてのゼミナールである。

ゼミナールは、18世紀にドイツの大学で発生したものとされているが、はじめのうちは、教授の自宅での一部の選ばれた学生を対象とする輪読会のようなものであった。この意味

で、ゼミナールはもともと、単なる授業形態の一つというよりは、教授とその周りに集う学生の共同体を意味するものであった。やがて、その教育方法としての有効性が認められるようになり、一般の学生にも開放されて、講義とならぶ授業形態となった。そのためにゼミナールは、今でも、ある特定の授業形態ないし教育方法を意味するとともに、教師と学生との共同体をも意味しているのである。

われわれの課題は、前者の授業形態ないし教育方法としてのゼミナールのあり方をめぐって議論することだけではない。同時に、後者の共同体としてのゼミナールのあり方について考察することも、われわれの重要な課題である。

3. ゼミナールのいくつかの形態

ゼミナールは、いくつかの形態に分類することができる。ゼミナールを分類するための一つの観点は、それが一般教育と専門教育のどこで行われるのかということである。この観点からは、一般教育のなかで実施される教養ゼミ（基礎ゼミとも呼ばれる）、専門教育の入門期で実施されるプロゼミ（これが基礎ゼミと呼ばれる場合もある）、専門教育のなかで実施される専門ゼミ（プロゼミに対して、本ゼミとも呼ばれる）の三つに分類することができる。言うまでもなく、もともとゼミナールは専門教育の後期において実施されてきたものであるが、近年、大学の教育方法を改善するために、専門教育の入門期や一般教育でも実施されるようになってきたのである。

もう一つのゼミナールの分類は、これをどういうやり方で行うかという観点からの分類である。そのやり方は多岐にわたるが、最も一般的なやり方は、テキストの講読を行うものと、各自の研究テーマで発表するものがある。その他に、ディベートやフィールドワークなどを採り入れたものもある。

どういうやり方がよいかは、それぞれの大学の学生の質や専門分野、ゼミを主宰する教員の得手不得手、先にみたゼミを実施する時期、さらに受講している学生の数など、さまざまな要因によって違ってくるであろう。

ちなみに、私が香川大学の教育学部で担当しているゼミナールは、以下の4つである。

- ①「教養ゼミナール」：いろいろな学部の1年生25名が受講している。ほぼ隔年で担当。
- ②「教育学チュートリアル」：教育学研究室の2～4年生をいくつかのグループ（5名前後）に分けて、グループごとに設定した研究課題に異学年の学生が協力して取り組む。研究成果は夏の教研合宿で発表する。「縦割りゼミ」とも呼んでいる。
- ③「教育学演習Ⅰ」：いわゆるプロゼミ。教育学研究室の2年生約15名が受講している。今年度は6回分だけ担当。
- ④「教育学演習Ⅱ」：いわゆる本ゼミ（専門ゼミ）。3年生でこのゼミを選ぶと「毛利ゼミ」という共同体に所属することになる。

この他に、履修表の上では「教育学演習Ⅲ」という授業もあるが、これは4年生になったゼミ生（卒論生）に対して行う卒論指導である。本来なら、こちらの個別指導をチュートリアルと呼ぶべきかもしれない。

4. ゼミナールにおける教師の指導

上の4つのゼミナールでの私自身の経験の反省に基づいて、「教師の指導のあり方」について考察してみたい。